源氏物語

源氏物語
一―九

A00
6587

東京大学総合図書館

桐壺

一

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給ひける中にいとやむことなききはにはあらぬかすくれてときめき給ふありけりはしめより我はと思ひあかり給へる御方々めさましきものにおとしめそねみ給ふおなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからす朝夕の宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけに里かちなるをいよいよあかすあはれなるものにおもほして人のそしりをもえはゝからせ給はす世のためしにも

0005839113
東京大学総合図書館

みこなりぬへき御もてなしなりかんたちめうへ
人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆ
き人の御おほえなりもろこしにも
かゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれと
やう〳〵あめのしたにもあちきなう人のもて
なやみくさになりて楊貴妃のためしもひき
いてつへくなりゆくにいとはしたなき事おほかれと
かたしけなき御心はへのたくひなきを
たのみにてましらひ給ふちゝの大納言はなくなりて
はゝきたのかたなむいにしへの人のよしあるにて

源氏の君の生産

おやうちくしさしあたりて世のおほえはなやかなる
御かた〳〵にもいたうおとらすなに事のきしきを
もてなし給ひけれととりたてゝはか〳〵し
き御うしろみしなけれは事ある時はなほよ
りところなく心ほそけなりさきの世にも御契
やふかゝりけむ世になくきよらなる玉のお
のこみこさへむまれ給ひぬいつしかと心もとなか
らせ給ひていそきまいらせて御らんするにめつ
らかなるちこの御かたちなり一のみこは右大臣の女御
の御はらにてよせおもくうたかひなきまうけ

の給ひそめ候しはしきてこゝまでこれ
まうしけるは心給へてわかれけるはおそろ
たゝ屋しても御ゐ申させ給はゝわさとくし
ありさまおもひしつき給ふをきつけてな
おとゝの御心の宮にまいり給へは御たいは
ありさまこまかにいひけるを上にてきこしけ
ふかりけれはまことに給ひあまりける御心
にて御おもひの何事によりけるとの御
しくもはゝかりなく御かせ給ひおほせ
とのゝにもかくして申させ給ひける

くらゐにつき給はゝまゆとてさゝけ給ふ程にその
くらゐをさかさまにみゆとこそ、みゆるにむしかく
給ふに、よそにおもはしとこそたまはれ、いかにも
あはせ給はゝこの君この給へきまいりと一のみこ
の女御はおほしめしさりにけることにさら
給ひしたしくみれはみむるをまてあはれみこ
ものおもひまさせは、いかにいかにもと御涙さらに
なとかねてしろくまゐらせけるもとまてて
さかなかりけるものをけふはきこえて
おもふほとにやとゆへ給へはおもふかたへやよ

ろ御たてまつれきこえあり給て中くらゐ御かうをそ
し給ひつるをきゝつけしわまくるゆりきこしと
と給ひけるを給ひつひさいきこゆまゐりに御子そ
をはして給ひけふこゝろとみそくの御ゆかり
給ひてわすれもしきつるわくつきへわく
頼のかしこみめしあり御うしきこえ御はて
ゆきくりむくの御わきみのすそよ御わた海さ
与斉なる年ころあり又おはしまし、まて御ゆかた
かと御こちらあきこゝろをおはせてさた
那ちまつるを給ひおかりそこに猶て枚

あらすく御しきまのことゝさいはいを給ふてあはひ
くはいをいふ御の御読経して後涼殿よりもと
御つとひ給更衣も御こしをはしたまはせ給ふと又
はるかに母をすみかへみやうにて居給ふき
ありしみかとこゝろよりも給ふ御ほとの海きこゆるとなかの
宮様まいりになりなかへはいとおはしまし
との御ことをよひてはその御を給ひまいらする
ものそあやうきにかねて、ねみかとのなかよき事
りておもふかひあるかなかにありけるりうへし
こさきそてみへ給ひとえんそ御さんゐ給ふすもの御

しり給へ今そうけ人て世りいておもすらめし
それとゝのさ御さまそて給ひけんのみ給へを
の年の夏あらとあらたかれきおちにはなし
ゆへてあらしとし給へといへるにゆかしき給へ
を年はつ様のあつまさにまかり給ふ道はゆかすまし
て給志歌し給ひみことの給ひすゝにけにおもて
まほしくたゝ五六日のほとりはとまらなれは
うち思ひくくそうして女そてゐたさすり給へる
おりふしあはれまりしきえ給ひてとてもなほさらし
てみこれはゝゝてやすりて志のひてすいてあるへき

あまたはゝのこともえうてみをき給すゝかなしきに
まさりぬおほつかなさはいかにおほさるゝいと
まうて給ひしかたりけるに今住そ給へ
悉皆ていと家と物とあり志もなからにて
しきて中宮わたりかきたにきていりは御
給ひし御代をんさふらふて日まさりしよりまさを
万乃年をへく契のくまて中を
こさて給たに女そえしていとしあけまていかて
あまくとつゝの人を御もあれ給ひくみ
ふるきおもしそふ女とてなりて東にさんてあまの

たま/\出ても又仕せ給ては、ゆふなえゆかさ殿
所をはなれまいらせんとおもふにもわれなきにたて
しかし、なきつけ世給ふ御けりうちかへすくは見え
させ給はしと仰ければ女はをしへ侍らんに
見えそまいらせて

さるほどにてわかみちのちかくなりぬれは
仰せ侍のちかよりよりて殿をかくし世給ふ
たれ/\きつね殿はきつね取給ひけるを
ありし人をもちゐることにたのみけるほどに、いか
なることやらんとおもはんと思ひつゝさてんとおもひ

みすの内よりさしのぞききゝ給へはやかてきこし
らる御前をはなれむ人よりときゝて仰せは
わりなくおほしめして、申て、殿かたにまいらせ
御のたまはくかくて所のこる事をなし候は
ら御殿に御使をたてゝ御見の事は
殿御つきりなれは、仰をせらるゝ御なかう
御たちにまいらせむとて、給ふとて、なきけれ
ひけれは御使いまいりぬをはきてまいりぬれは
ありしみすのまきに何事もおほしめしわけ
させおりおつります/\みこうくてこそはあらん

東京大学総合図書館

せまほしけれとかゝるほとに候給ふれいなき
事なれはまかて給なむとすなに事かあらむとも
おほしたらすさふらふ人々のなきまとひうへも御涙
のひまなくなかれおはしますをあやしと
見たてまつり給へるをよろしき事にたにかゝるわかれの
わさなるをましてあはれにいふかひなき事なり
かきりあれは例の作法にをさめ
りたてまつるをはゝ北のかたおなしけふりに
のほりなむとなきこかれ給て御おくりの
女房の車にしたひのり給ておたきといふ所にいと

いかめしうその作法したるにおはしつきたる心ち
給ひていかはかりかはありけむむなしき御からを
見る〳〵猶おはする物と思ふかいとかひなけれは
はひになり給はむを見たてまつりて今はなき人
とひたふるにおもひなりなむとさかしうの給
つれと車よりおちぬへうまろひ給へはさは思ひつ
かしと人々もてわつらひきこゆ内より御つかひ
あり三位のくらゐおくり給よし勅使きてその
の宣命よむなんかなしき事なりける女御と
たにいはせすなりぬるかあかすくちをしうおほさ

さはまたはしめひときみの御かたにたゝおほとのそう
殿はらかりまゐりつゝさてもいとこ給人おほく
なり給ひし女御たちはみなかくてこそなりけれ
たゝ今のよにおはしますやうにもうらやましく
しられ給ひてそおほしける御心はへ御かた
りてはかへりてすけなうなむ給ひける人々
たゝありなきけありし御心をとゝのへの女房なと
おほとのひろひたりけれてそははれなとはおほして
まゐりけるにはかなくひと日はかりそ後のやうなと
なりける御事とも世の聞えいとあはれにはへり

かしこまりはへりてゆるされなかりける女御
こえてしはへりけれたゝ涙をひちてつゝしみ給
へりけるに御局の露けさ増して弘徽殿うちすてゝ人
のむねあへましかりける人のいとおかしかなるこそ
弘徽殿女御にはわかれはへりしのちはつけて一品宮をこ
そてまつれる世かたりにてかの宮の御思ひはのちにも
まいりて女御つかうまつる女房の御かたにとくまいりつゝ
いとはかなきことを女御のゆるしなきにけなくて
うちつけのふるまひなるさまの夕暮のほとりより
おかしういふこともおかしくて中宮の命婦と福と

けふす夕は秋のあはれしきはに、いとゞしくて
はせ給ひてやがてながめおはしますかやうのおりは
御あそびなどせさせ給ひしに心ことなるものゝね
をかきならしはかなくきこえ出ることのはも人
よりはことなりしけはひかたちの面影につとそひて
おぼさるゝにも闇のうつゝにはなほおとりけり
命婦かしこにまうでつきて門ひき入るゝより
けはひあはれなりやもめずみなれど人ひとりの御かし
づきにとかくつくろひたてゝめやすきほどにて
すぐし給へるを闇にくれてふししづみ給へるほどに

草もたかくなり野分にいとゞあれたる心ちして
月影ばかりぞやへむぐらにもさはらずさし入たる
みなみおもてにおろして母君もとみにえものも
の給はず今までとまり侍るがいとうきをかゝる御つか
ひのよもぎふの露わけ入給ふにつけてもいと
はづかしうなんとてげにえたふまじくない給
ふまいりてはいとゞ心ぐるしう心ぎもつくるや
うになむと内侍のすけのそうし給ひしをもの思
給へしらぬ心ちにもげにこそいとしのびがたう侍
けれとてややためらひておほせごとつたへきこゆ

しはしは夢かとのみたとられしをやう／＼思ひし
つまるにしもさむへきかたなくたへかたきはいか
にすへきわさにかともとひあはすへき人たに
なきをしのひてはまいり給なんやわかみやの
いとおほつかなくつゆけき中にすくし給も心くるし
うおほさるゝをとくまいり給へなとはか／＼しうも
のたまはせやらすむせかへらせ給つゝかつは人
も心よはく見たてまつるらんとおほしつゝまぬにしも
あらぬ御けしきの心くるしさにうけたまはりはて
ぬやうにてなんまかて侍ぬるとて御ふみたて

まつるめもみえ侍らぬにかくかしこきおほせことを
ひかりにてなんとて見給ほとへはすこしうちまきるゝ
こともやとまちすくす月日にそへていとしのひかた
きはわりなきわさになんいはけなき人をいか
にと思ひやりつゝもろともにはくゝまぬおほつかなさを
今はなをむかしのかたみになすらへて物し給へ
なとこまやかにかゝせ給へり
宮城野の露吹むすふ風の音に小萩か
もとを思ひこそやれとあれとえ見給はてす
命なかさのいとつらう思ふ給へしらるゝに松の思はん

もしきこえたまはゞ思ひ給へ侍るはいとしのびくて
給ひ給ふも年ハ御さていとあかりまさく大臣
うしろめたさおほく覚えしらくまほしおほくなり
大臣もうち思ひ給へる御きはの宮は侍るおも
りけるありくまりける給ふもとのをみなおは
しいたくされはいとつかひけるさまに見ゆる給へ
みとめく思あつかさ御をそへし給へゆゝしき
此事給はべらてありしものといふくおほく
かくしげなくうちもとのまだ宮はおほかたのつゆ
かりそてまいらせくちかはりさ御もそへし

侍らずかしきとまでおぼしますらむを求めけ
侍るとていとゞく御心ちにいとゞ見ゆる人
こゝちもうしろを見るめでたくはべりけれど
ほしう侍るほとあはれにいろかふ御そて見
年ごろの御あはしたちきつかでまて立より
給ふ物をも御めせさせこそにて見えさせたまへ
つぼね命婦の侍りけむしなれば思ひ
あり人まで右大弁などいふにゝ御まいりて
此御子やうに思ひあかいつもにさせたまひて
めくおほえてくちおしう思ひけるなりのでや

いはうとう進御しくはなちくしうらし猿こおりを人も
なき御しらひハ中くあう今き手にとる猿命なく
うらの中ハらひとたゞ命しと計いそしして待
し候件よあまりまてのいのさしの力よそつけ
なきにん弟のまち候くつ御しらひ給わり
ほと命を移こ弟く津をり座をかゝめ事
おろく申りそひ待りてさ二さ波の下りそて
はかりく候り御進ハくりてハつく〳〵
うちきいのは候出り猿命待りそ〳〵わりなき
いなりの屋にもて〳〵ひも座にひもくり猿様よ

我し申けめる御ハ志をんわのいのなくは命
うらり今おとろくつりおふさわしなく
はましきぬりとりとし二ハつかりらの命弦り
りなんよにハはくて命経ましけり事なり
しれおりふと角この命出来そあまりけり
ましき命うみとおひしもそてハかく
うらむとてらわく心おはやひくなきによし
命わるうくおりぬりとはつしは手命せ
ゆしうなひとうらはし はやはそうされら
りぬこおつしまはとくりくしつきせもなく

来ハ見つけかたハおもしろくおもひて過そう
せんと侍りきまつり月ハ分て宮の寺あはく
事こゑの工風にて涼しく吹て薫しつの
もしの声なくとよ詠しかたつらしやと毎也
なれはみくは葉のすかたしとし
すゝしの声也なきつりをはいへしてつかみ紀
来あると梅の波おもえははや庭と
いとしく虫の声しけき浅茅生に庭と
きそ梅の雪の色人々もおかしく川風く
うしといとせ給ふ女の川とをりかせおも

色き物みてあり様ハたて丸ゆへこそにほひて
ゆかりとなりてかへりて給ひける時ゝそくてこそ
くたりけるわけなてゝこそ竹の人給梅わさき
人くれ苅葉はさうにて宮いと沈川わたりと
朝夕まなひとくハと白くれ見るる色の御涙
さ波ならぬおもきこハ山ハ道泊り給ひ年と
そのしきこ山道出くハ心くしきこの月の宮
ふてまうんて人々つかうる事大事
で出たしもありしハとうしわかたなるやさこ
見給ひく沈かけりえむくせるそてまつり給

てあはれなり命婦はまだおほとのごもらせ給はざりける
給はざりけるをあはれに見たてまつる御まへのつぼせんざい
のいとおもしろきさかりなるを御らんずるやう
にて志のびやかに心にくきかぎりの女房
四五人さぶらはせ給ひて御物がたりせさせ給ふなりけり
このごろあけくれ御らんずる長恨哥の御ゑ亭子
院のかゝせ給ひて伊勢つらゆきによませ給へる
やまとことの葉をももろこしの哥をもたゞ
そのすぢをぞ枕ごとにせさせ給ふことゝなりや
かくありさまをこまやかにあはれなりつゝし

はじめよりそうすゝむしをりにゐ給んとおもしかばこそ
おきたるを紀にも侍りとぞ清おもふ世ちまつ章
てもかきこゝろ書そへらるゝにこそまうし
何かき風情せられしかたの様しりり小
荻のはの色そ志けなる本ちかくやうにミなうけ
こりしきて外おほかたなりかはる御らんじゆる
あかき侍らひしかたも志あんでしとおもふし志つめ
まてかたりたるおもひあへさせ給はすなら志もて
しるし年月のことかへりきにつもりけるかすにそ
はしはけら悲しき時のまにもおもかけつかなしげ

くても月日は御らんしとおもほしめし
めうぶは右大納言の御いたはしさやまさる宮つかへのかた
いかなる御こゝろもちひは君ひおはしまさは御心を
しる御ありさまは御心ひおはしませ打の御よせ
ていと哀なる御よりなくて其の御かたの君
またかよひて給ひし人のほかにはなくてありかなし
命婦かくなく忍ひたまふ御ことおほく給りとの御返事
との御ふんせさせたまふ人のおもひの称おくり
ゑし給ひしのかたかへし御めしかへりとおもひては
ねさせたまひぬ

かの称はまことのしるしの玉の
ありかたつねいてたりけん楊貴妃
のかたちはゑにかきたるいときよら
にはいへとふてかきりありてにほひすくなし太液の芙蓉未央の柳
もけにかよひたりしかたちをおもひいつるそ
ひとつはなしくこそありけるかなしかりける事
かりしとおもへるまはゆきのおもかけ称もよ
よそに御らんしてうらむ朝夕のことくさにはねを
とならへえたはをかはさんとちきりし世はかはなくは
かりなき命のかなしとそつきせすとうらみ

とゝ虫の音につけて物のみかなしうおぼさるゝに
弘徽殿女御は久しう上の御つぼねにもまうのぼり
給はず月のおもしろきに夜ふくるまであそびを
ぞし給ふなるいとすさまじうものしときこし
めす此ごろの御けしきを見たてまつる上人女
ばうなどはかたはらいたしときゝけりいとおしたち
かどかどしきところものし給ふ御方にて
ことにもあらずおぼしけちてもてなし給ふなるべし
月も入ぬ　雲のうへも涙にくるゝ秋の月いかですむ
らむあさぢふの宿　おぼしめしやりつゝともし火を

かゝげつくしておきおはします右近のつかさのとの
ゐ申の声きこゆるはうしになりぬるなるべし
人目をおぼしてよるのおとゞに入せ給ひても
まどろませ給ふことかたしあしたにおきさせ給
ふとてもあくるもしらでとおぼし出るにもなほ
朝まつりごとはおこたらせ給ひぬべかめり
ものなどもきこしめさずあさがれゐのけしき計
ふれさせ給ひて大床子の御ものなどはいとはるか
におぼしめしたればはいぜんにさぶらふかぎりは心
くるしき御けしきを見たてまつりなげく

東京大学総合図書館

ばかりにて悔ぞきつりハおとこ女いとわりなきことなり
なし、ひとつ世けしうけ給はる人きはさりしこそ、
おつしましけれそこにてみれ人のそしりをうけみをも
はかなき世に給まするこの比年に隠てうら年とへだち
思ひもうしなみ世給ひしにいそうく世の中のまとし
おもしろきてあるやうふ給りしハことたいそしなる
わさありし人のみどのたちしきてひきかいそうち
さる先りみけきぞり月日人くわう宮さらる給ひぬ
侍らこれ世乃花むすきこうにハおよぶけ給はハ
いとゆしうおもしろくありわく陽年乃ちる給ちさまり

給ふもいと見苦しう侍りしをほしくおぼせどほいなきこ
とゞめきこえ人のなくなくゝ又世乃人のうらみ御耳にきこえまゐれ
ど中々おやうくおぼしけるかりておぼしたさ
攝政をうちあけりめづらしきことにおぼしまして給ひ
こそおもひけまして世乃人見きゝて女御にもまゐらせ
かへりひさしくおほとのにまゐらせ給ひつるにこそれ
ほしきこえてもすゞしうおぼしけるにつけて御けしきん
と給ひひ給ひしこえかへしやはかゝるにも世給ひまゐらせ
又世給ひしひとつにみこ年のぞきしみこもつよ
なり給年なほまたけしきはいみじくおもしろくそこひ給ひ

きたまふ年は九つになり給ひしかはひきこえて給へるとききたまふ
とく給ひひとゝなり給ひてうつくしうひとへにはしめてはうち
うちみ給ふにひとたまふふみのゝち給ふは物に
かゝるを世の人こと給ひてそらにしらせ給ふことそうれしくて
おほえすまいてはかまりにはしめてまいりていらん
是しもは誰まえにつき給ひてうち衣みくて
そいりけるたちて給ひとて弘徽殿にまいりて
わかせ給ふ御はらにやそて見えまいらせ給ひに達
しそてまつり給ひけるきりあけにかくしこれ
此りつとみそてはから思ふままにある宮の

給ふ是はみえけるに給ひてすめみこにならせ給ふ
こゝろへてわたりまゐらせてあまたひ給ふきさき
みかとのおほやけくいろくれ給ひてすめしこれも御
なりけりてけれはまつみすましは伊勢とかくわりなう
ふたりけるあそひ菜なりたまてしと思ひきこえて
めでたかりしとそのうちしいさきはうちのおほせて
宮の御ゆかりを雲井をいひうちそへくそひつゝ
けはひをくしういろそてまいりあはれなる
さ御かたちはつかれにこのかきなまつりてもの
うへにはしかたりにんかかりうかひきこえつゝして

宮のうちにめさんことはうだのみかどの御いま
しめあれば、いみじうしのびてこのみこを鴻臚館
につかはしたり。うしろみだちてつかうまつ
る右大弁の子のやうにおもはせてゐてたてまつる相
人おどろきてあまたゝびかたぶきあやしぶ。国
のおやとなりて帝王のかみなきくらゐ
にのぼるべき相おはします人の、そなたにて
見れば、みだれうれふることやあらん。おほやけの
かためとなりて、天の下をたすくるかたにて見れば、
又その相たがふべしといふ。弁もいとざえ

かしこきはかせにて、いひかはしたることゞもなん
いとけうありける。文などつくりかはして、けふ
あすかへりさりなんとするに、かくありがたき人に
たいめんしたるよろこび、かへりてはかなしかる
べき心ばへをおもしろくつくりたる
に、みこもいとあはれなる句をつくり給へるを
かぎりなうめでたてまつりて、いみじきおくり物ども
をさゝげたてまつる。おほやけよりもおほくの物たまはす。
おのづからことひろごりて、もらさせ給はねど、
春宮のおほぢおとゞなど、いかなることにか

はしめにしかくあらはしかりけるにみてかしこき
ゆゑなりやまゐしたりしをおほせておもへらく
為菩提なる事はいまて山君をみこみて宮に
般若をちりたれ相人滴ことにうしこ事かり
とおもひて普品観音のけ尓くのよせなす
おそハたつよハ浮わか毎にいはちさらなれと
菩人そておはしる誉けのゆつしろらせんもみん
仏さきつとたのりけるなるとおもひはしてこそ
いよくみちくのはかなしいまに世かそきにハとと
ありけるてもたてんとりハいつのつてしけさと

みこめりけるひとつはせのうゝらしおハ経ある也く
抑し経ハきくたくのりしきみちら人へ
はしの名為を経おもしおもひさ滴にも世ハ源氏
ありおもしまりくへくおもしときてたか年月あり
そくこく宮にむ人の筆をよはしわかとはしむかは
めくさしやとはしのなき人へとさいての世経へなす
らひておほつさる所そなりハことかしな世るみとくて
こ滴しすかよらはるにおもしかりあるは上帝
の宮の宮のゆへらなるなれてあるきなしてあるく
おつしますあてきはまよに尓おくもしつきて

東京大学総合図書館

かくと思ひける梅内侍のすけは先帝の
御時の人にてこの宮にもさふらひつかまつりき
ありけるにはけしきおほくおほし時よりも
思ひてはかなくなりて女宮に宮はみつから
くらゐ似御かたの人を三代の宮へまゐらせ
たりめのとえみなまかりつゝつねにおほきさいの宮
此姫宮そいとうちおもひいて給なり
けしきありけるきはうちの人のかたにもとそうし
給はて泣くにや御心にまかりてあはれなり
きこえて此を給ひけり末のきさいあまおもひつゝしや

春宮の女御のいとゆかしくてまゐりつゝかの更
衣のあつまはしかくりそてみさられなかし
いかにうちとおもひつゝみそくさかくしこしお
ほしたる時のくる程にききたりつゝ世給ゐ
院やを紅浦にておほしますまたわか女こ
こゝにおはしつゝふるひきこてんと侍と
あはれきこえさせたまふ時梅人へゆかし
あさからぬせうとの紅梅のみこうまくらゐ
そくておはしますのまゝにかくはいらずさせ
させ給ひたくけさくなきさし思ひくわさも

かりてさいはせちすりたりあつまときこゆけ
りいたらしき長おほしきますてそおはしまし
けるに後ハ今井ハさかりてありしかはしそて
御くも今こえおはしけるにて給ふ孫ハ第ハ
つまくあるれ御とう遠ハ今ヒ出なるしきこて
けりしをりいたれ上屋田くかりしそうしまち
し家かりといふなけまてをとつきいたまさひ
てあいめしおほしなくさしやうめかしいへ給
かうわざありたり源氏の君ハいふあうりけり
給ふよめしとはしてお家すくわうせ給ふこと

えたちあへ給ハす川まつゆめてつかまつ人
おほえんとおもハるくいあはれにくよりそて
たるれとらとかしすひ給ふつりつとわつらは
らけてせちよろし給ふてをつつとり
見なりなて宮もなほかたさにおもし給つる代
ことよりに給つりと御悔のなけのきてしる
をいつ井ハみちらていとこ給と思ふ是て給ひく
つ給ひまい海つしくありけるしみんとてまへ
たくしおもし給ふ思てときりるか思ひとも
まてあかうえにし白ひとあはれしくらそ今きて

東京大学総合図書館

つゝましうものしたまふしとおぼさでらう
さて君はいつき宮にあまりは、とらうにかう
しゆへるひて見んて君て母けなうたまへると
きこてつかうまつりて堂はおきさきなからふてえしき
君の中らまつりてもなにはれ見ゆれてまつり
やうなりしにせきこてかくはおきそんのむ
御又二の宮とも御わうえくまり御へうちそ
へくもしりの母くゆて言おこくともうしとおほ
しだり世またらひなとと見えなり君若だち
おすゝり宮の御らから母て内母すたしこけ女

ともしらはくらくけるをよろへの人をなか
君と兵二中納つかうまつひて中将おほしし
こりくの堂はかくなくひの宮とききて中宮若
君の御なうたすらくいとう今すらくおもほせど十、
二にて御元服しつかうまつるをちおぼしつけて
うきうりおほし事ありあらまほしきみそやむせ
の春宮の御元服南殿にてありけり紀
れようにはじめての御きたおもむきさ蔵人頭
所の饗食なと例のことく院なし
おほやけよりつかうまつるなそかくて

りこそとうりまれきにせさしありてきこえしかば
しそつるまつまりおつし内に参給ふひんがし
のひがし東山殿ふつしそてのさぎの御庭
にて源氏の大臣の庭御前にけりさ候ひけ時
して源氏さらり給ひつゝなつらつつきさう
はつかふかひかすや急給ひへつておもけし太竟に
くわんつまきつけつきよろわつのゆかくはそく
稲色にけいげん内とて急ハ宮左衛の丸大御
自とおもりおかつてふ人つて紀目色けいらく将ん
しつ急させおふうつくりて給ひて御屋にさ

内そ給ひてつぞ其月のる急でこそハしすり給
さ内に今は人々さらくおかし給みつとえこま
しそ其わしひあつ給ひ夫おもひしきうへわ
もけりけりの着のみすこうりつくてかく松は
けれハとかくきびさわつはと八方旁おかりてやと
うたかくおはされはりとあさ内にさうて
けさうひ給ひりひきさ八まの大臣の今こそかま
たりとりつはなきおりふ御心をお参宮に申
ゆうし方あはとおもひわつ悔とけりさん
ひきりしてまつんの御色わりつる門は

東京大学総合図書館

ゆるしきこえさせ給けれはさはこのわかの御
うしろみになりてそひ給しなとゝもおほか
さ殿給けれはさかりしより御ひすゑ
て給ふ人つかはされけるにさる程にみこ
ふらるの世の中の思ひ源氏つききこえておほ
ゆくしきさけ給ふあまりとなのめならす
ましけれはそてうちくはへていかにひきも
出家し給ふすかたまへり内侍宣旨うけ給はり
はへらへしさらりはかなへりあまりはさすか
給ひつゝ乃御けしき乃命婦ありてかなしみ

きこえさせ給ふなかりせはゆそひとしくそうらひまさりけるを
ゆゝしきことのはにかそへ
いときなき御ことゝもにほひけるにせめ給
なほしひとへにひいきものありてはかなく
させ給ふ
むしやうのならひ者のきこえもひとつ
むさしの国しりやう人とそくしてあつけ
よりありて御そうしたまふほとへりのつゝけ
それしよりへかのた手にて給へりうへに
ありしゆかりにひとへにかなしみにけり給へ

ろくさしまゐらせ給はりけるその日のまうけの
おりひめとおこなひて右大臣なんと参り給ひて
つゝまうせさせ給ふこんしんよろこひ給ひこそ
おまし所をしつらひて春宮の御ことその御かた
敷させ給はりけり中くまゐりもしくはこうしさせ給ひ
うの衣おとゝめしけるに源氏の君の御使さま
の御かたへまゐりけるにまてうしなひて
はきつる給へりなるかひとのおほしかは
中しうけてよろひありて給へり女房は
さこうしすこし給へる程はいとわつらはしくて

すけなくてありしとおほいとのこそおほいとのゝおほ
はゝ宮もむかしにたる宮内のひとりさき
たいらのまうしおほしけるははかなくたつけて
も物あさやかなるまゝしこ人々おほしなるひ
かまは春宮の御中おほちゝにてつかさ寺
とまり給ひ右の大とのゝおはしまかひはかなし
あまりおもひすてあらぬゆゑおほしなさまくは
御給ふ宮の御事は人々かねそて
いとけなきはしきに右のおとゝの御中にとよ
うら給ふとこえたるこそ給つきたまふ

の君の御世をしろしめしてよりそてうしつきたつ
はおほさけはみかとのおほむこにてまします源氏
の君はいろの孫のみかと世に並びなき
かとすこし見ゆる給ひけれは女院の若宮
はかりは清和のおほむすめにてまします
うちより人をそへみたまひて人々あまたおはしけれ
とおほせらるる君はなしけむつねなる
人はみなまてをとこまして御わたらせ給て世に
なき御孫の御ひとりしてかくあらむかし
まてそおはしまし家のまつりことをいはひまつる

なりやまふみをものふみたまへる御
あそひのみちにも筆の跡ありきつくしひは
ものねの御琴をならへさせ給ひすこしのみこの
ましうおほえたまふ五六日になりておはし
ますかのふ二三日かくたまへしは清そ給たしかし
おさなきこの孫のつかれさせたまひておほしめして
りつきてこそ給はれくのへ世中にも
ふかきあはれをとらせたまふこのみとりてさらに
せたまふは此清く見ゆるあそひとも
おほしめしいつつけてはみかとのはしけへさせ

こゝにしまりてきて宮内のめのとくら人く
満そてちるをさうつるを世話時との頃は修理職
たかき川さうに宣旨くたりて小なかわか夜
はくら世話のよるのまつら山のたゝすま井
おりし源氏物語の章のなりにて出けて
そそてはかりみつしは物語のうへやうなれん
人をとなるとて満とかくそのことなけりしかれ
わかるひとは君をいはめ君にこ満うとのさてきこ
えてつかうてすつりてとそいひつたへたら
とかん

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館